第二部（インタビュー・銃後）

お米屋がお米の買出し

石井　英一郎

（お米屋が廃業に）

僕は昭和六年に生まれ、小学校四年生の時、昭和十六年十二月八日、太平洋戦争が始まりました。家はお米屋でしたがお米が統制になって（食糧の配給制度でお米も配給になった）商売も厳しくなりました。さらに、戦況が段々悪くなって、家の裏に消防のポンプが置いてあり、表通りに引っ張り出すのに家が邪魔だからと、家が撤去されました。（強制疎開）それでお米屋が廃業になったわけです。そうすると収入が無くなりました。騙されたのかな？　魚藍坂にあった家の方に小学校六年の時引っ越しました。そこに今でも住んでいます。

（戦時下の小学生）

小学生時代の戦争の思い出といえば、十二月八日の真珠湾攻撃の時やその他の戦況は、学校の廊下に大きく貼り出されました。たとえば、手柄を立てて戦死した人は、軍神と言っておだてられました。シンガポール陥落の時には、野球のボール（※注一）を貰った覚えがあります。それを、僕等の年代の人に話をすると、「あ、そう言えばそういうことがあった」と言っていました。それから、兄と一緒に、ラジオを持って川越までお米の買出しに行きました。お米屋が、ラジオとお米の交換というのも変な時代です。リュックサックを背負って取り締まり（※注二）が収まった時に駅の改札が通れるように、夕方から行くわけです。結局さつま芋しか買えなくてリュックサック一杯つめて、帰って来ました。思い出すのは、兄と近道の真っ暗な森の中を通った記憶があります。一寸先も見えないのに、ドクダミの白い花だけが見えました（※注三）。

（中学時代の戦争）

三田の慶応中学に入学しました。あの頃、商業学校が工業学校に変わりました。慶応にも工業系が出来ました。学校が始まって授業の時に、英語の教科書が無いわけですから。先生が女学校の教科書を持って来て教えてくれました。戦時下ですから英語の先生も苦労したのでしょうね。また図面を描くのに紙が無い時代ですから、それで先生がツルツルのアート紙（※注四）を持って来て、これに図面を描けっていうわけです。でも、図面など描けるものではありません。ツルツルでね。だけどその紙しかないから書きにくいがエンピツで図面の描き方を教わるわけです。それから、各学校に軍事訓練の教官が配属されて、軍事訓練をやりました。でも、二言

目には「戦地の兵隊さんを思え」って、「戦地では、どんなに苦労して」と教官は言っていました。一つ面白い話がありまして、ゲートル（※注五）を巻きますよね。その時ゲートルの最後が真横に来なくてはいけない時代です。そうしたら、僕の友達が小細工をして、中でひだを付けて（※注六）最後が横に来るように巻いたわけです。ものの解釈の仕方って面白いもので、友達はごまかすためにやったのですけど、先生は、「そこへ持って来るのに苦労した」ことが偉いと、ほめました(笑)。

それから、戦局がどんどん悪くなって来て、慶応の三田の山（当時稲荷山と言っていました）にも兵隊さんが駐屯をはじめました。ところが訓練というと、昔の大八車（大きな木製のリヤカー）を一人が引っ張って行くと、大八車を戦車に見立て、伏せをしていた兵隊が手榴弾を投げるわけです。戦車は視野が狭いですから、至近距離まで待ってから手榴弾を投げる、そんな訓練をやっていました。僕は目の前で見ていて「あっ！」と思って見ていましたけど、その時確か腰につけていた剣は竹でした。戦車に見立てた大八車に近づき手榴弾を投げる訓練をやっていました。

※注一　当時野球をするのにボールもなくボロを丸めてボールにするとか、ウドンコボールというすぐ駄目になるボールしかない。当時ゴムがないから運動靴がないから裸足でした。野球グローブもお米に交換した。

※注二　今考えると当時は米は「隠匿物資」としていくらかもっていたが米にイモ、豆など入れて少しでも米を長くもたせるようにしたのではないか、生きるために。

※注三　白い花のないところが道となる。

※注四　うすいカレンダーのような印刷用の紙。ケント紙が本当の紙。

※注五　ゲートルとは、当時、中学生以上一般人もズボンのすそにテーピングしていた。

※注六　しわをつけるとなぜいけないの？　歩くとほどけてすぐおちてくる。しっかり巻いて。巻き終わりが外ヨコにくるように教えられた。

第二部（インタビュー・銃後）

戦時下と戦後の暮らし

稲葉　八重子

（戦時下、女子挺身隊で田舎から）

私は新潟県の田舎で農家でしたから、戦争の影響もあまりありませんでした。十八才の時、女子挺身隊として鶴見の軍需工場に来ました。旅なんか出たことは、ほとんどありません。工場には若い人たちが大勢挺身隊として働いておりました。田舎からお餅なんかを送ってくるんですよ。そうすると、お餅がかびていますとそれを皆で、ナイフで削って食べた思い出があります。同じ村からお友達がけっこう来ましたよ。そうですね、二十人くらいかな。工場では、金属を削る仕事をしていましたよ。挺身隊は、冬場だけで、後は新潟へ帰って農業をまたやりました。

終戦は、新潟県西蒲原郡漆山大字並木で迎えました。本当に、戦争の苦労は、そんなにしませんでしたね。

（戦後の新橋）

戦後の昭和二十二年、東京に出て来ました。かえって、東京の方がひもじかったですよね。私は、新橋四丁目にお嫁にきたんです。私が来た頃は、新橋もバラックが建っていました。それでおじいちゃん、おばあちゃんが新橋のバラックに住んでいました。私は本当にバラックにお嫁に来たんですよ。今の人たちと違って、姑さんがいるから嫌だとか、そんなことは思ってもいなかったですね。やはり、お嫁に行かなくちゃならないと自分でもそう思うし、夫の顔も嫁ぐまで見たことが無かったです。だけれど親がそこに行きなさいと言うものですから、嫁いで来ました。

食糧難の時代で、親戚が田舎から出てくる時、お米をお腹に巻いて来て途中で取られたという話を聞きました。お米は統制品でしたから、持ってきても警察に途中で取られちゃうんですよ。新橋の元桜田小学校のあった通りに闇市がありましたね。新橋の闇市は有名だったそうです。うちのおばあちゃんは、闇市の品物を夜預かって、翌日、その品物を持ち主に返すようなことをしていましたね。そんな思い出があります。

毎日新聞

第二部（インタビュー・銃後）

新潟での戦争体験

匿名希望

（田舎での戦時中の暮らし）

戦時中私は新潟県の長岡より二十キロほど入った三条市近郊の田舎にいました。空襲の影響もあまりなく、長岡空襲の時にも飛行機が上を通過するだけでした。でも通過するだけでも怖かったですね。三条の町中では役場から家を壊すよう命じられる強制疎開もあったようです。

食べる物は農家でしたから不自由はしなかったです。お米や野菜は作っていましたし、魚も海からかついできましたし（笑）。都会の人は大変だったと思いますよ。疎開で来た人や街の人たちはお金や古着を持ってお米を買いに来ました。でも検閲が厳しかったから、途中で没収されてしまう人も沢山いたようです。でも母は絶対に闇米（内緒で売り買いされるお米）を扱いませんでした。ただ、たった一人女性の方ね、子供を一人背負ってもう一人の子供の手をつないで来るその人だけは、黙って家に入れていました。その親子にご飯を食べさせて、残ったご飯は全部おにぎりにして持たせ、お金は一銭も取りませんでした。いつも来ていました。戦後ずうっとたったある時、私が田舎へ行ったら嫁さんが、「嘘みたいな話なのだけど、お母さん聞いて」って言うんです。八十才くらいのおばあちゃんが、「戦争中こちらのお母さんに食べさせてもらい、うちの子供も立派に育ったのに、今までお礼に来なくて申し訳ありませんでした。お仏壇に、お線香をあげさせてください」と言って、仏壇に手を合わせて帰ったことがあったと言うのです。「あのおばあさんの話嘘だよね」と私に言うの。「ほんとの話よ、私の母は闇米を扱わなかったけど、子どもを育てるのに苦労をしていたあの人にだけは、お金をもらわないで援助をしていたのよ」と嫁に言うと涙こぼして、偉いねって私に言いました。

（二人の兄の戦争体験）

長兄は、新潟の新発田（しばた）連隊で、教育係を七年やっていて、教育係でいれば死ななくてすんだのですが戦地へやらしてくださいといって頼みに行きました。結局これが運命の分かれ道で当時、北海道の千島列島の松輪島で終戦となりました。終戦と同時にソ連領になったのでソ連の方に回され、その後北朝鮮から韓国まで連れ回されて、日本に帰って来ました。家に帰って来ても、今みたいにお医者さんもいない時代でした。東京で医者をやっていたおじさんが、長岡に疎開して来ていまして、薬を持って来てくれましたが、なか

なか頻繁には来れません。それで小学校の保健婦さんが、注射に来てくれていましたが、来ない日にはね、夜私が呼ばれて兄に注射をしました。本当は許されることじゃないのですけれど、布団の上にちゃんと座ってね、脊髄から水を抜くんですよ。あれはかわいそうで、忘れられないですね。いやですね、あの姿は思い出してもいやです。それで亡くなったのですけど。母はそれでも帰って来て亡くなったから、まだよかったって言っていました。外地（日本の領土以外の場所）で亡くなった人たちは、ゴミのように穴の中にドンと捨てられたような状況でしたから。

次兄も、今の中国に行って帰って来てました。毎日、ドジョウを食べさせられたことを怒っていました（笑）。今でも、元気でいますよ。八十才を過ぎていますけどね。戦争は、二度と経験したくないですね。

第二部（インタビュー・銃後）

戦争と暮らし・ドングリも食糧に

太田　紀江

（慰問袋が偶然に）

小学校四年の時に戦争が始まり、女学校一年まで今の西新橋一丁目にいました。千人針もやりましたね。それから、学生時代は、戦地の兵隊さんに色々な物を詰めて手紙を書き慰問袋を作って送りました。そうしたら戦地にいた、四、五軒先の隣組のお兄さんに届いたそうです。手紙が来たから判りましたけど、あれにはびっくりしましたね。偶然とはいえ、そんなこともあるんですよね。

（疎開先でも空襲）

女学校二年の時に、母と一緒に千葉の茂原にある知り合いの家に疎開しました。下の弟は集団疎開で鬼怒川のあたりに行きましたけど、私はおばの所へ行って、地元の女学校へ入学したんです。そこで八月に終戦を迎えました。茂原には飛行場が駅の傍にありましてね、家の裏に軍人さんの施設があったのですね。そこがアメリカの飛行機から機銃掃射されました。学校の側の松林の中にある防空壕へ避難しました。あ

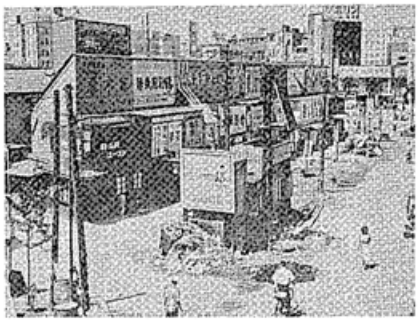
んな田舎に海軍のあるということがよく分かりますよね。畑の道を歩いている人が撃たれたりしました。学校では慣れない畑仕事をやっていました。千葉での生活も疎開先が農家ではなかったものですから、母が苦労していました。着る物を持っていってお米に替えたり母がみんなやってました。朝早く出かけて行きまして、お芋だとか色々なものを仕入れてくるんです。それを子供ながら見ていてね、感謝していましたよね。

（新橋の空襲）

父と姉が新橋にいましたから、東京の空襲は千葉の家の窓から見て毎日のように心配していました。姉は私より八才上で、父と一緒に新橋の家を守っていたのです。五月の港区の空襲で、新橋の駅まで全部焼けていました。私のうちの一角だけが、焼け残ったんです。二階の窓から、新橋駅のホームが丸見えでした。私の家はガラス屋でして、新橋周辺の同業者は皆焼け出され、姉たちが同業者のお世話をしたみたいで、食べ物もない時代ですから相当苦労したらしいです。ご近所の父の友だちの焼け出された同業者が十人くらいがいたみたいで、それこそ食べる物は無かったと思いますよ。

（戦後の暮らし）

私は終戦後、半年は茂原にいて、女学校三年の四月に新橋に戻って来ました。新橋はその頃、闇市が沢山ありました。隣の家がみやげもの屋さんをやっていまして、アメリカ兵がよく来ていました。私たちは、チューインガムなどを貰ったことがあります。東京に帰ってからの生活も大変でした。今、ビルが建っている所に、さつま芋を植えたりしていました。さつま芋の茎を炒めて食べたり、トウモロコシの粉をお団子にしてから、すいとんにしたりして食べました。毎日のようにすいとんを食べていましたね。ドングリの粉も食べましたよ。ドングリの粉は食べるとどもりになるぞと言われていましたけれど、なりませんでしたね（笑）。まだまだお話はつきませんが、平和な日本であってほしいですね。



新橋の闇市／毎日新聞

第二部（インタビュー・銃後）

母と父の戦争

大西　勇

（子供心に戦争は！）

私は、終戦の年の一月に生まれました。両親と兄姉が荒川に住んでいましたけど、焼け出されて港区に来ました。終戦後、家のベニヤをちょっとずらしたら、屋根の下が少し焼けていたことを憶えています。家の近くに、戦後も防空壕ありました。それから、近所の人が機銃掃射で打たれて死んだって、母が言っていました。

戦争で財産を失ってしまうと、地元であっても貧しい生活で、差別的な境遇はありました。子供の頃は分からなかったけど、何ていうんだろう、野球大会とかで選手になれないなどですね。それも、戦争の影響だとは思うけどね。

親父がやっぱり警察の写真班だったものですから、全国を撮影に回って歩き、……広島とかに行っていれば、原因分からずに一応肺炎ってなっていますけど、亡くなってしまいましたね。戦後親父が持っていた写真や電機器具を、進駐軍の人がただで持って行っちゃったらしいです。近くに大使館があったでしょう、ソ連大使館やフランス大使館、そういう話を聞きました。

漆畑　廣作　画

漆畑　廣作　画

第二部（インタビュー・銃後）

戦時中の学生時代

小浜　晋

（旧制高校も戦時色一色）

戦争が始まったのは旧制中学の時で、当時中学は五年制でしたが私は四年で修了となりました。兵隊が好きではなかったけど、戦争に行かないと周囲から白眼視されますので、中学三年時に陸軍士官学校を受けました。一次は学科試験、二次は口頭試問と身体検査でした。一次は通りましたけど、二次試験で落ちました。

その後旧制高校（現埼玉大学）に進学し、寮に入りました。戦時下でも、授業はありましたね。戦争中は理科の学生だったので、徴兵は来ませんでした。文科が先に召集され、理科は技術者を確保するために残されたようです。私が寮から出た後、寮に焼夷弾が落とされて完全焼失。自宅のあった練馬は、東京のはずれでしたので、空襲の実害は受けませんでした。食べ物は段々粗末になっていき、寮の食事は海にある藻のようなものをゆでて、うどんのようにしたものを、かわらけの丼で食べていました。

軍事教練の授業は、一週間に三、四回あったと思います。歩兵銃で空砲での射撃、匍匐（ほふく）前進、銃剣術や野営などの訓練がありました。戦況は、ラジオや新聞でしか知ることが出来ませんでした。戦争ならではのものとして、家庭では隣組制度というのがあります。班長がいましてあれこれ指図をしていましたね。嫌がると問題になるので、嫌だと思ってもみんなは従っていましたよ。学校では部活動がありまして、私は機甲班で、入学直後、浦和から大宮まで強歩に参加したり、飛行機や車のエンジンなどを分解したりしていました。でも、部活動も戦時色の強いものに変わっていきましたね。

（終戦時無気力に）

終戦時、玉音放送は聞きましたが、初めて聞くものでしたが、戦争も終盤になるにつれ、もうダメだという雰囲気はありましたので、半ば分かってはいたことでした。でも、それを表には出せませんでした。憲兵がいまして、監視されていましたからね。終戦時は反動で頭がボーッとしていて、余り積極的に動かなくなりました。進駐軍が埼玉県朝霞に来て、労働者を募集しましたので、草むしりなどをやっていました。そして昭和二十二年三月に卒業したのです。

第二部（インタビュー・銃後）

家族で歩んだ戦争

加藤　とく

（姉を頼って上京）

いくら話しても、苦労話はいっぱいあります。十七才くらいの時、東京で看護婦をしていた姉を頼って上京しました。その看護婦の姉がお金を出してくれて、目黒の洋裁学校に一年行きました。それ以来私は洋裁一筋です。他には何も出来ず職業として六十才まで働きました。

警察官の夫と結婚して、寮で新婚生活を始めた時から、お店は持たずに家庭で仕事をしていました。戦時中は、私の田舎もありましたし、警察官という職業柄食べる物にはそんなに不自由はしませんでした。パン工場があって、三日に一度ずつパンを差し入れてくれたのでお隣の学校の先生の家族五人と、分けてあって食べたりしていました。

（赤ん坊を背負って転々と）

夫は夜、ほとんどいませんでした。空襲になると出勤しなければならなかったのです。そのため赤ん坊と私だけでしたので、戦火の中を子供を背負って逃げて歩くのが大変でした。直ぐ隣の小学校の先生が年配でしたので、ずいぶん面倒を見てもらいました。

笄町に住みまして一年すぎて空襲にあいました。家の前の道路に沿って百坪ほどの広い空き地があり、地主さんにお願いして一ヶ所出入口を開けていただきました。サイレンが鳴るたびいつでも外へ出られるように持ち物を用意。三月になりますと毎日のように夜、前の空き地にござ、毛布を敷き隣の家族五人と一緒にお世話になりました。四月何日かすぎた夜九時頃、ひゅー、ひゅーとすごい音とともに丸い大きなボールのようなものが落ち、同時に空き地一面花畑……。明け方になって気づいたときには土足のままお寺の本道にいました。夫とは別々でしたので二日後に会うことができました。夫は空襲になると仕事に向かいますので別々だったのです。空襲の翌日になると、夫が「見た」って家の側の木に墨みたいなもので書いてありました。やはり家庭が心配だったので途中で見に来ていたのだと思います。

最初は、笄町で焼け出され、麻布の明治屋の近くに落ち着こうと思っていたら、そこでまた焼け出され転々と三回しました。もうオムツも無くなっちゃったし、しょうがないから赤ん坊を背負って田舎に帰ろうとして信濃町まで歩きました。そうしたら青梅の方へ行く電車がないって言われ、また中野まで歩いていきました。荷物はもうありません。ちょうどお

菓子屋さんでクッキーかなんかを一缶もらい、あとは何にも持つ物がない状態でした。中野から電車を乗り継ぎ中央線の青梅に行ったのです。

（終戦後はドラム缶のお風呂）

戦争が終わって昭和二十年の十二月に、青山斎場（青山葬儀所）前に戻り住み始めました。主人は、六本木警察署に勤務していました。住宅は、元陸軍の将校さんの住宅でして、その一戸を借りて住んだのですが、水道はあっても水があまり出ないんですよね。出しっぱなしでもお風呂は使えないし水も汲むのも大変、燃やすものもないでしょう。ドラム缶でお風呂を作って使っていました。墓地が近いので、かやが大きく伸びたものをを刈ってきて燃料にしました。そういう暮らしが昭和二十三年くらいまで続きましたね。始めは、畳も何も誰かが持っていって何もない状況でしたから大変でしたよ。

第二部（インタビュー・銃後）

戦前・戦後の出産子育て

鎌田　君子

（戦時下の出産）

あの当時は皆モンペをはいて、下駄は木を下駄の様な形にして、鼻緒も自分で作りはいていました。買出しに行って捕まった人も沢山いました。とにかく食べるものがないから、お大根、それからお芋などをリュックに背負って買ってきました。しかしなかなか売ってくれないんです。お金じゃ駄目で、品物を持って行かなきゃならない。品物を持って行くのにも、色々なんです。おばさんにいじわるされたこともありました。「売らない」って言われ、おじさんが「せっかく来たのだから」と言って、リュックに一杯お芋と大根等を売ってくれました。電車の中ではお米は没収されるけど、野菜は捕まるってことはなかったので良かったなって思ったこともあります。

終戦の一年前ぐらいかなあ、戦争のまっただ中、二十四才で結婚しました。父は新橋でブリキ屋をしていました。兄妹が大勢いましたけど小さい頃死んだりして、結局残ったのは私と妹だけです。結局私が家を継がなきゃならない立場にな

ったわけです。それで養子を迎えたのですが、その人が兵隊にとられ戦地まで行かないうちに死んでしまいました。富士の裾野で、一ヶ月かそこらで病死してしまったのです。その時、私のお腹にはすでに子供がいました。昭和二十年終戦の年、七月の三日に長女を生みました。そして八月十五日が終戦ですからちょうど、空襲の激しい時ですね、東京では出産できませんから母の故郷神奈川県の秦野（小田急線）という所で産みました。先にいろんな荷物とか何かを疎開して、間際になって行ったわけです。警戒警報が病院で鳴ると暗くしなければなりませんので母は「産湯を、出産のお部屋に持っていこうと思っても、暗くて分からないので。ずいぶん困ったのよ」と言っていました。母が大変な思いをした時のことを、私はすごく憶えています。夫が亡くなる前に生まれてくる子どもに「富士山にちなんで、富士江って付けてくれ」と言い残し七月二十七日に亡くなりました。靖国に奉られています。

終戦までの間、秦野、厚木がありましたから、空襲警報がよく鳴りました。初めての子供でね、お乳をあげようと思ってもお乳の飲ませ方も思わしくなくて、赤ちゃんの口がどのあたりかしらなんていいながらお乳を与えたことを憶えています。

（終戦後の子育て）

終戦後間もなくして、東京の西新橋に帰ってきました。ちょうど家の一角だけは、焼夷弾も落ちないで残っていました。もちろん終戦後ですから、食べるものは、お米がないのでトウモロコシの粉のパンとかで苦労しました。父の仕事もだんだん少なくなり年もとってくるし、私の苦労よりも父母が大変でした。私は、赤ちゃんを抱えて、父母に頼りきりと言うわけにもいきませんので、アルバイトで働き始めました。愛宕警察から区役所方向へ五十m程の所に進駐軍の男女将校の宿舎が有りました。宿舎内のランドリーの仕事でアイロンかけを頼まれました。その時初めて、マネージャーって言葉を覚えました（笑）。今でも夏は特に弱いんですけど、アイロンかけの蒸気であせもがボコボコ出きてしまい、マネージャーが見かねて「可哀想だから少し休ましたほうがいい」って、家に帰ったことを覚えています。石鹸もあまり無い時代でしたから、お土産に持って帰ると母が喜んでくれていましたね。

秦野のほうに親戚の従兄が、兵隊から帰って来て、家が農家で闇市へさつま芋を売りに来ていました。さつま芋といっても、今みたいに甘くありません。水気があっておいしくないの、でもそれが売れるんですね。三角の袋を作ってきてね、それにお芋を入れて、秦野からわざわざ来て、闇市で売り東

京にはうちしか親戚がないので、新橋の烏森神社のすぐ出口の所で、店を広げていました。私も子供をおぶって、お昼の交代の時間に、三回か四回店番に行きました。恥ずかしいのとご近所の方がいるのじゃないかと下を向いていたのを覚えています。

（若い方へのメッセージ）

今の若い方はね、少し我慢というものがないなと思うんです。すぐにカッとなったり、ご近所と親しくしたりすることもないし、昔みたいに、つながりがないんですね。これで良いのかなあと思いますよ。私としては、すごく淋しい感じがします。思いやりも少なくなったと思います。

第二部（インタビュー・銃後）

戦時下の暮らしと仕事

神谷　栄

（上京し起業）

私は、大阪から二十二才の時に、東京へやって来ました。それから、七十六年間新橋です。

東京に来て最初に銀座八丁目菊亭の経理をやりました。そして、銀座の美人座の会計をやって、日比谷通りにビジネス家具の店を持って、ビルも建て七十六年になります。戦前の新橋は、商店も少なく、日比谷通りは、日が暮れると真っ暗でした。

私は昭和五年の徴兵検査で、甲種合格しましたが、戦争には行ってないのです。新橋三丁目の町会の徴集が二回もあったのです。その都度二十名くらい徴収されたのです。私もびっくりして、子供がもう三人も出来てみんなまだ小さいので芝区役所に聞きに行きました。兵事係に聞きますと、「神谷さんあんたもう兵役ありませんよ」と言われ、クジ逃れで、国民兵（在郷軍人）になっていました。国民兵だから、いよいよ敵が上陸してきた時の兵員です。「ああそうですか」と言っ

て、癪にさわったり安心したりでそれでとうとう、あの大戦争に私は行きませんでした。甲種合格で珍しいですよ。それで戦時中、警防団を組織していました。ポンプにしても、消火用具にしても、役に立つとは思えませんでした。当時の警防団の手帳があったので、それはいま、四谷の消防署の消防会館に保管してもらっています。

（戦時下の暮らし）

それでですね、事務所用家具は、戦争が激しくなったから売れなくなって、金属も使ってはいけない、そういう時代になりました。金属は、なにもかも供出しました。弁当の箱の缶があるでしょ。それがなくなるんですよ。また半分腐っているようなものも食べる。食べないとそれしかないんですね。お金があっても買えない、そんな時代でしたよ。

どんどん空襲が激しくなりまして、床下に穴を掘って、その上に板を置いて防空壕にしました。今考えたら、バカみたいなことですよね、そんなことで爆弾から守れるわけが無い、その中に家族がしゃがむのです。今なら誰も本気にしないけれども、そういう時代だったのです。空襲でみんなが電気を小さくして、それこそ何にもしないでじっとしていました。

（疎開先で終戦）

戦争で家具屋ができないでしょ、だから蒲田の高速ジーゼルという会社の経理に行ったのです。海軍の監督工場だから、毎日海軍の下士官が五人ほどいました。下士官が「日本はどこの戦地でも敗戦でもう長くないと思います。あなたはお子さんがあるのなら疎開したほうがよいのではないか」といわれ、菊亭の主人が大分県臼杵に帰省すると言うので、親子五人が九州に向かいました。途中B29航空機より射撃されたりしました。現在なら東京大分は新幹線で十時間くらいで行きますが、戦時中は四十時間くらいかかり疎開も大変でした。子どもがトイレの用を足そうにも通れず、窓の外に抱いて用を達するという状況でした。疎開はしたが友人もなし。金銭では米が買えず衣類を売り食いする有様です。最初は知人のところへいたのですが、子どもが小さいので迷惑と思い他を借りることにしました。借りたところは十畳の板の間です。井戸が三十メートルくみ上げなければならないので小さい子を抱えるあたしたちは大変苦労しました。

半年がたち八月ラジオで敗戦が告げられほっとする。日本が敗戦。お金はないな、どうするの？

数ヵ月後、大分市内に移転し建具店の跡で木工場があったので家具の製造販売を営むことに……。官公庁とも取引し、

朝は七時に工場へ行き、木取り（用材に適した形にすること）を行い、職人約十人に渡し、午後はセールス、帰っては塗装・金具付けなど大変な仕事に従事して休む暇もありません。しかし大分にいては駄目だ、とにかく東京に帰ろうと借金をし新橋の田村町に三階建ての木造を建て、また家具屋を始め、八年後現在の九階建てのビルを建てて現在に至っています。

東京都

東京都

第二部（インタビュー・銃後）

戦前・戦後体験

小阪　喜代

（実家での空襲体験）

私は戦争中、東京におりました。夫と結婚したのが、五月で、新婚生活四ヶ月目の九月にもう召集令状が来てしまいました。夫はプロ野球の選手でした。当時、名古屋軍と言いまして、今の中日ドラゴンズですけれど、ショートをやっていました。戦前の名古屋軍は、強豪チームで、夫は私と同じ三重県の伊勢市の出身だったものですから、チームメイトから伊勢神宮とダブらせて、神主さんと呼ばれていました。夫が選手ということで、いつもネット裏の良い席で見せて頂いて、通路であの頃の川上（後の巨人軍監督）さんとか有名な選手の方ともよくお会いしました。試合の最中に「空襲警報」が鳴ることもありました。そうするともう選手もゲームもバラバラですよ、みんなパーと逃げて避難しました。その後、後楽園にも高射砲が入りまして、野球もできなくなりました。

入隊した夫は、最初は今の中国、それからフィリピンへ行きまして、終戦の時には台湾におりました。私は、一人で東京にいても大変だったので実家のある三重県伊勢市に帰って、

夫の帰りを待つことにしました。伊勢市には伊勢皇大神宮があり、皇室にゆかりの神社ということで特別の師団がおりました。特別の軍隊がいるということで、それをねらって空襲、集中攻撃がありました。ジャラジャラジャラって音がして、焼夷弾が雨のように降ってきました。油の臭い、油煙のね、あの焼夷弾の油の臭いがプーンとして黒い煙がね、もう町の中を這い回っていました。その中を神社目掛けて逃げて、焼夷弾が来ても焼けないように神社の手洗いの水をみんな頭からかぶってお社さんの中でじっとしていました。それでも怖くなってきて、今度は近くに近鉄の駅の大きな建物に逃げようと思ったら、警防団の人に怒られましてね、「二十一や二の女の子が、そんなおろおろ走っているとは何事か」ということでしたがもう必死でしたよ、本当に怖かったです。頭の上からもう、焼夷弾が降ってくるんです。まるで花火みたいに空から降ってくるんです。実家は運良く焼けませんでしたけど、婚家のほうが町の中心にありましたので、焼け野原になりました。私の荷物は婚家にありましたから全滅です。伊勢神宮も樹齢何百年という大木までずいぶん焼けました。夜は、何回も焼夷弾の集中攻撃がありました。昼間は昼間で機銃掃射といいまして、飛行機に乗っている人の顔が見えるくらい、ものすごい低空から機関銃で攻撃してくるんです。私たちは急いで、防空壕の中に入るんですけど、それが本当に怖かったです。空襲は本当に苦労しました。

（戦後の暮らし）

戦争が終わって、三ヶ月ぐらいで夫が台湾から、当時貴重品の砂糖を沢山お土産にして、伊勢に帰って来ました。その時の夫は、戦場でチフスになったり、銃弾が貫通し傷を負ったりしまして、野球の出来る体ではありませんでした。戦場で亡くなったプロ野球選手も沢山いました。私の実家のすぐそばの出身で、戦前の名投手沢村栄二も、レイテ島で戦死しました。お墓は私の実家のお墓のそばに、野球のボールの形で建てられています。夫は、無事に帰ってきたわけですから、すぐ東京に戻らなくちゃならないでしょう。戦地から帰った選手を集めてプロ野球は直ちに復活しました。ところが、私を連れて行くには、私が無職では当時東京に入れませんでした（急速な人口の増加で、転入制限を実施）。

それで新聞記者という肩書きを付けてもらって、夫と二人で東京に出て来ました。たとえ夫婦でも、職業を持たない者は、東京に住民登録が出来なかったわけです。

（平和への思い）

若い人に、伝えたいことは、とにかく戦争は、しちゃいけないということしか無いわね。絶対戦争に向かっちゃいけな

い。もうね、色々ほら、食べるものだとか色んなことで、辛い思いいっぱいしたでしょ。だからね、とにかく日本は二度と戦争しちゃいけないの、もうそれが一番根本ね。

昭和館

第二部（インタビュー・銃後）

七才の戦争の記憶

狐塚　房子

（楽しいことでしたら憶えています）

川崎に住んでいました。七才くらいの時だから、そんなに（笑）覚えてないのよね。戦争が怖かったこととか、防空壕に入ったこととかという記憶はあるのですけど、疎開に行く時に汽車に乗って、大変だったと思うのね。兄弟もばらばらになって。お姉さんは川崎に残って、それで、私たちは母親と一緒に新潟に疎開しました。新潟のおばあさんの家に疎開して、食べるものもそんなに無かったかもしれません。戦争が終わって、すぐに帰って来なくて、小さい時だったから、あんまり覚えてないのよねえ。もっと楽しいことだったら、きっと覚えてるのでしょうけど、辛いことって忘れるのよね。

第二部（インタビュー・銃後）

路上で丸刈り

五島　範子

（小学校を出て直ぐ理髪業）

私は大正十四年、神田の生まれです。たまたまご縁があって、私の母親が床屋さんと再婚しました。昔の親は、子どもを早いとこ一人前にするというので始めはお店で働いていたわけです。小学校を出てすぐですから、十二才の時です。あの時代はそんな時代ですよね。私は理髪業になる気持ちはなくて、学校の先生になりたかったんです。その後、渋谷の大きな理髪店に行きました。私は、最初お客さんの爪ばかりを磨いていました（笑）。大きくなりまして、戦争が始まりました。戦争もだんだん激しくなってきて、親戚の関係で先輩が富山に連れて行ってくれました。疎開です。しかし富山でも空襲でパチパチやっていましたよ。だけど寂しくて、先輩と一緒に戦争が終わらないのに、「死んでもいいから」と東京に帰って来たんです。

（戦時下路上で散髪）

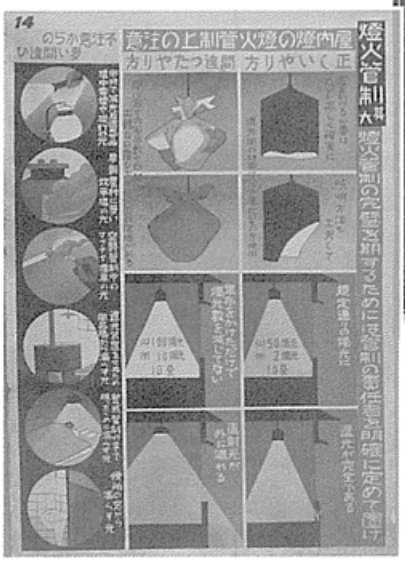
戦争中、お寺に子どもがいっぱいいましたから、私はいつも頭を刈りに行ってあげていました。帰りに歩いていたら、「これから戦地に行く知らせが来たんだけど、この頭で行けないので、刈ってくれませんか」と言われました。あの頃は床屋も疎開していません。それで、通りで頭を刈ってくれって言われました。兵隊さんは丸刈りですからバリカンとカミソリだけあれば良いので刈ってあげました。バリカンとカミソリはいつも持っていました。「これから戦地に行きます」って。だけど、あの人が無事に帰って来たかどうか。路上での理髪業でしたけど、すごく喜んでくれました。もちろん、お金なんか全然取りませんでしたよ。病院にもいきました。病気の軍人さんだけが、戦地に行かないで病院に残りますよね。でも沢山亡くなりましたね。病人の頭も、しょっちゅう刈りましたよ。

（理髪業で良かった）

戦争が終わって、日本銀行の理髪部に入りました。銀行の人は忙しいですから、全部やらないでいいのよ。それと、一週間に一回、女性の人だけの日がありましたよ。そのうちに、アメリカの人も日銀の床屋に来るようになりました。その後、

私は一人前になりたいから、銀座のお店に移りました。東京の生まれですもの、銀座でしょう（笑）。私今になって、理容で手に職をつけてよかったと思います。少しは辛い思いもありましたけどね。

昭和館



第二部（インタビュー・銃後）

戦時下の男の子

小林　靖彦

（軍事教練の思い出）

僕は岐阜市で、昭和九年の一月に生まれました。戦時下で、印象に残っていることは、戦争に行って帰って来た、ちょっとお年を召した兵隊さんがずいぶんいました。在郷軍人と言って、ほんとに大変な時にまた召集されて行く予備兵さんですよね。その人たちが、普段は自分の家業をやっていたのだけれど、軍事教練の時は教官として、軍服を着て学校に教えにくるわけです。色々なことを教えてくれました。

（海洋少年団の思い出）

私は小学校五年生、六年生で海洋少年団に入りまして、水兵さんとまったく同じ洋服を支給されました。帽子も全部支給されて、当時はうれしかったですよ。だけども合宿に行ったらものすごい、とんでもない所に入っちゃったなと思いました。まだ、親が恋しくてしょうがない年代に、大変厳しい

訓練をさせられました。岐阜の長良川に行って、ボートに二人ずつ、そして教官が一人乗って漕ぐんですけど、どうしてもバランスが悪くて、平均に漕がないと真っ直ぐ進まないわけです。同じ力で漕げば真っ直ぐに行くけども、片方だけ力入れちゃうと、グルグルグルグル回っちゃう、それでしかられたりしました。殴られますよ、すぐガーンですよ、どれだけ殴られたか。

（先生の思い出）

戦時中、親父と一緒に伊勢神宮に行きました。当時は、軍人さんを輸送する貨車がいっぱい通るんで、時間通り走らないでしょう、とんでもない所で、ものすごく待たされるわけですよ。当然、学校に遅刻してしまいました。学校で、また先生に殴られるって言うと、親父が、「戦勝祈願に行って来たって言えば、先生は怒らない」って言うから、子供の頃だから戦勝祈願ってどういう意味だかよく解らないまま、「おまえどうしておくれた」、「伊勢神宮へ戦勝祈願に行ってきました」、「ばかものー」と殴るんですよ。そりゃもう、今じゃ考えられないでしょう。とにかく話の分かる先生もいましたけども、徹底的に軍国主義の先生もいましたしね。そりゃね、この先生は殴らない、この先生は殴る、この先生はものすごく優しい、先生もいろいろありましたけどね。でもだいたい厳しかったですね。

（岐阜空襲の思い出）

岐阜が、七月九日終戦のちょっと前に、大空襲で爆撃にあって、焼け野原になりました。焼夷弾で、私たちの寝ている部屋の蚊帳に火がついたんです。焼夷弾って凄いですよ落ちてくる時。大雨の時のようにザーザーっていう音がするんです。庭の防空壕も駄目で、「そら逃げろー」って川の堤防へ逃げたんですよ。長良川が近くですからね。戦時中、庭のない人は、防空壕を家の中に作れと言われました。今考えてみれば無茶な話です。家が壊れたら、防空壕から出られないじゃないですか。

（強制疎開の思い出）

それと、疎開する前に家に来て、「ここは全部引っ越せ」と、こんなロープでもって地元の消防団とお年寄り連中が、ロープを引っ掛けて、私の家を全部倒したんですよ。道路を広くしなければいけないということで。避難するにも、軍用トラックが通らなきゃいけないとか、みんな泣きの涙で、泣きながら自分の家を壊したんですよ。引っ越す前に、タンスやな

んかズラーと並べて、売ったんですから。持っていても、しょうがないから売るって、だから大変な市になりましたよ。家具市って、ほとんどタンスでしたけどね。金属は、兵器を作ると言うことで、持っていかれました。親父は、体が弱かったので、召集されて行ったんですけども、その日に帰されました。だけども、その時に一緒だった人たちは、皆、戦死しちゃいました。親父はそれからいくらか長生きさせてもらったけど、四十三才で亡くなりました。

（慕っていた人の死）

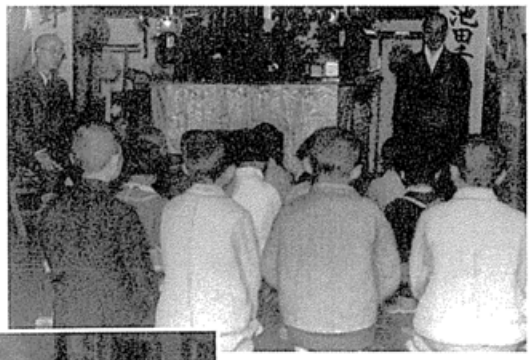
「田舎だから、食べるものいっぱいあったでしょう」と東京の人に言われるけど、とんでもない、ほんとになかったですよ。ええ、ほんとに食べるものはなかった。だから、一番楽しみだったのは、兄貴が少年航空隊に入っていて、航空隊の兵隊さんがすごく可愛がってくれてました。「お腹すいてんだろう、いつでも遊びに来いよ、飯は食わしてやるから」って、その航空隊へ面会に、もう毎週行きましたよ。行けばキャラメルはある、何でもあるんですよ。何でだろうって思いましたね。「ちょっと寒いな、おいちょっとガソリン持って来い」ってね、ガソリンを持っていって、鶏小屋のはめ板をバーンって、はずしてガソリンをまいて、火を点けて「暖ったかいだろう」って、そんな調子でしたね。こんなことやっていいのかなって、子供ながら思いましたよ。肉じゃがも、食べさせてくれましたね。今でもその味を忘れません、肉じゃが。何でこんな所に、牛肉があって、こんな飯食えるのかって思いました。兄貴に連れられて行くのが楽しみで、楽しみで、兄貴と一緒に行くんですよ。ある日、面会に行くと、その人はいませんでした。「低空飛行の練習中に、琵琶湖に突っ込んで戦死しちゃったんだよ」って、戦死でした。「だから、お線香の一本もあげて帰ってくれ」って言われて、兵舎（兵隊さんが寝起きする建物）に入りましたら、先週まで、ものすごく可愛がってくれた人の写真とお骨が置いてあって、きちんと祭壇になっていましたね。そんなこともありましたね。

ちょうど六年生の時に終戦ですから、ものすごーく嬉しかったですね。空襲がないっていうだけで。

（若い方へのメッセージ）

若い人にいいたいことは、物を大切にして欲しいと言うことですね。ご飯を残したりすることなどは、自分の子どもに対しても厳しくいいましたけど、すぐお父さんはと言われました。でも私たちは、物が無い時代を知っているだけに、物の大切さが解るわけです。そういう意味で、軍国主義はいけ

ないけど、韓国のように、規律ある生活の体験も必要かもしれませんね。



学童疎開

学童疎開

第二部（インタビュー・銃後）

戦時下の青春

榊原　静江

私の家は関東大震災迄は外堀で（元リクルートがあった所）大黒屋総本店という呉服屋で他に和服に関する一切の仕事を受け、銀座のデパートや呉服店の仕事をしていました。店の者も常時五、六人はいたようです。震災後区画整理で表道りから少し入った所に移動したそうです。もちろん一般のお客様のお仕事もさせて頂きました。私が子どもの頃は、外堀通りは市電を始め馬方が曳く牛馬車や自転車、円タク、人力車たまにトラックが走るぐらいでした。銀座は店の者がみな兵隊に行きましたので、私が自転車に乗って各デパート、呉服店など回っておりました。考えてみれば、何とか両親を助けなければとよく働きました。

母の兄が、千葉の大原で旅館をしていて、お魚や野菜など便利屋さんを使って送ってくれました。普通はうるさいらしいのですが、ちょっとした心遣いで田舎からよく運んできてくれましたのでそれ程食べ物の苦労はありませんでした。それも戦争の始めの頃でした。

三月十日の東京大空襲で深川の親類が二軒、堅川町の一軒

は家も丸焼けで家族四人が亡くなりました。もう一軒は姉夫婦です（姉は早くに亡くなりました）。深川高橋で義兄と子供四人が焼け出されました。片方だけ靴をはいたり、やかんの蓋だけ持ったり、目も顔も腫れあがって戦火の中を歩いて家へきた時は、すすで真っ黒で別人かとびっくりしました。私共も、持っていた戸越銀座の貸家を二十軒ほとんど焼かれてしまいました。渋谷の貸家（家作）は辛うじて三軒助かりました。あの頃はどんな苦労も、何とも思いませんでした。だんだん統制がきびしくそれこそ食べられる物は、何でも食べました。ふすま（小麦をひいて粉にした時に出る皮のくず）もたべました。母親がメリケン粉にまぜてお団子にして味噌汁の中に入れていました。私が一生忘れられないのは、近所の人がぬか味噌でパンを作って持ってきてくれた時です。さすがに食べられませんでした。みんなそんな物を食べたんです。熱を通すから、何ともなかったようです。ほんとにみんな苦労しました。

私たちの青春時代は、向こうから知り合いの男の人が来ると、足が横丁に向いちゃって、男の人の顔を、まともには見られませんでした。恥ずかしいのが先でした。同期生の男の人でも、隠れたくて足が横丁へ行っちゃうのです。親同志の約束で私が一緒になると決められた人は、慶応大学卒業後すぐに南方の方に参りましたが、ガダルカナル島のそばで大勢の人と軍艦ごと沈んで亡くなってしまいました。親同士が知り合いで、帰って来てからということだったのです。軍刀を提げ陸軍少尉の軍服姿でお別れの挨拶に来て下さったのが最期でした。手紙のやり取りはありましたが、検閲がやかましかったのです。ただ「元気で頑張ってください」くらいのやりとりでした。親がお葬式に行ってくれました。時々思い出しては涙がこぼれました。私は悲しくて行けませんでした。

戦後結婚した夫は、近衛兵でした。近衛でも戦争が激しくなってから、インドネシア、スマトラなどへ行き、交戦の時銃弾を腰に二発受け深い傷跡を見ました。よく無事に帰って来られたと神仏に感謝するのみです。又マラリアにかかったそうです。ふるえがきてすごく寒くなるそうです。戦地の思い出話を沢山よく聞かされました。その主人も昭和五十九年に亡くなりました。優しくてよく気の付く人でした。